『實相』譯語考

——鳩摩羅什を中心に——

白土わか

はしがき

大乘佛教において、實相という名稱は、きわめて頻繁に用いられ、また重要な意義を展開しきたつた。大乘の旗幟をもつて實相印とも稱し、シナ佛教には、佛教を二大別して、緣起系法門に對し、實相系法門があつた。ここには、その實相という、本來の飜譯語としての性格を、あらためて檢討してみたものである。

一、羅什およびその前後

實相とは飜譯語であつて、佛教以外の中國文獻には、その用語例を見ないといわれるが、その譯語の完成、意義の擴充は鳩摩羅什 Kumārajīva（A. D. 344—413僧肇誄による）によつて爲されたものと思われる。まず用例として、西晉の無羅叉譯（A. D. 291 譯出、出三藏記集第七による）放光般若經卷二十（大正藏八・一四五b）に

薩陀波倫白法上言、夢幻所見悉空無實皆無所有、法上報言、善男子、如來無所著等正覺說、諸法皆亦如夢幻、於夢幻法有實相者、不知如來但入如來名色身耳、便作如來來往之相、是輩皆是無智凡夫、是輩凡夫於生死當道有反數、離般若波羅蜜大遠、於諸佛法亦遠、於諸夢幻法、知諸法如夢幻爲識如來、於諸法不求有來往之相、亦不求諸如來有生有滅、諸有知如來無來無往不生不滅者、爲近阿耨多羅三耶三菩提不久、是爲行般若波羅蜜

とあるのが見られるが、このさいの實相というのは、夢幻にたとえられる空なる諸法に對する「實有なる、實體としてとらえられたるかたち」の意義であつて、普通に佛教學の通念である實相の義とは異なるようである。放光般若經には、如・法性・眞際という用語例も度々みえるが、羅什譯となると、如・法性・實際であつて、放光

般若經においては、眞實をあらわす場合には、眞を用い、實は實有の義であつたと思われる。

また出三藏記集第十二（大正藏五五・八三a）によれば、釋道安(A. D. 308～386)に、實相義のあつたことが見えるが、現に傳わらず、また出三藏記集にも、これ以上なんらの解說なく、これが如何なるものであつたか明らかでないが、[1] 道安は性空本無義を明し、實相義というより、性空義と呼ぶ方が適切であるといわれる。唐の元康の肇論疏卷上（大正藏四五・一六二b）にも

安法師立義以性空爲宗、作性空論、什法師立義以實相爲宗、作實相論

と述べている。

道安の實相なる語は、いかなる事情のもとに出されているのか不明であるが、出三藏記集第十二には道安の實相義に續き

○問實相王稚遠外國法師答　○實相論釋曇無威　○實相通塞論釋道含

○問般若是實相智非王稚遠什法師答

等を記しているが、この時代に實相論の活潑であつたことを知る。

これらの實相論の、實相という譯語の完成と、意義內容の充實とを、我々は羅什において見たいのである。羅什の飜譯經論における、實相という譯語例のおびただしさ、また出三藏記集第十四には、秦主姚興のために著わした實相論二卷ありと傳え、慧遠のためには大乘大義章に示すごとく、實相について述べている。前揭、出三藏記十二の諸々の實相論も羅什に關するか、もしくは、それ以後のものである。後にシナ佛教において展開した實相論は、まず羅什三藏において、インド思想の飜譯的出發を爲したわけである。羅什によりて、實相と設定し、飜譯された種々の事情を、以下、その主要なる飜譯經論によりつつ考察したいと思う。

二、中　論

中論十八章觀法（我）品九偈に

自知不隨他　寂滅無戲論　無異無分別　是則名實相

（什譯・大正藏三〇・二四a）

aparapratyayaṁ çāntaṁ prapancair aprapañcitaṁ / nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇaṁ //

(Prasannapadā, ed. by L. V. Poussin, P. 372)

他に緣らず寂靜であり、戲論によりて戲論せられず、分別を離れて差別の義なきこと、それが眞實性の相である。

實相の原語は、tattvasya-lakṣaṇa であるが、tattva 畢竟空無の眞實性の lakṣaṇa 特相・特質である。それみずからにして知り、他に觀待せざる、戯論寂滅の勝義諦なる tattva の特質を實相と定めたのである。つぎに十偈に

若法從緣生　不卽不異因　是故名實相　不斷亦不常

Pratītya yad yad bhavati na hi tāvat tad eva tat / na ca anyad api tat tasmān na-ucchinnaṁ nāpi çāçvataṁ //

もし何らかの緣りてあるほどのものは、實にそのかぎり、それと同じきものでない。また別でもない。それゆえに斷でもなく、常でもない。

緣起のゆえにあり、斷・常に非るものを實相としている。この場合、直接の原語はないが、その前後の內容からして、實相の譯語を加えて飜譯したものであるが、このような例は羅什譯において極めて多い。つぎに七偈に

諸法實相者　心行言語斷　無生亦無滅　寂滅如涅槃

nirvṛittam abhidhātavyaṁ nirvṛitte citta-gocare / anutpannā-aniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā //

心境の止息するとき、語られるものは止息する。實に法性は涅槃のごとく、生じたることなく、滅したることもない。

原語 dharmatā をもつて、諸法實相と譯している。dharmata 法性は、[2] dharma-svabhāva、dharma-prakṛiti と同義であり、[3] 不改作にして他に觀待せざる、無明の翳を遠離した智によりて證得せらるべき法の自體である。偈によれば、心の對境を滅せる、能所泯亡のところであり、涅槃と同義である。前出の tattvasya-lakṣaṇa とともに、勝義のすがたである。また dharmatā 法性を、實相の原語とすることは、大智度論にしばしば見えるが、その卷三十七（大正藏二五・三三四a）に

法性者諸法實相、除心中無明諸結使、以清淨實觀得諸法本性、名爲法性、性名眞實

とあつて、その樣相をしらせ、卷三十二（大正藏二五・二九七c）には

如法性實際……是三皆是諸法實相異名

とある。つぎに六偈に

諸佛或說我　或說於無我　諸法實相中　無我無非我

ātmety api prajñapitam anātmety api deçitaṁ / buddhair na-ātmā na ca anātmā kaç cid ity api deçitaṁ //

諸佛によりて、我ということも施設せられ、無我ということも示された。また、いかなる我もなく、無我もないということも示された。

我ということについての隨說示④ anuçāsana であつて、月稱註に示すごとく、言說諦に停滯するもののために我の有無を說く。しかし諸法實相中には、いかなる我もなく無我もないという。四句分別の中、三句をもつて隨說示となしたものであり、この場合、實相の原語はないが、第四句の戲論寂滅の勝義にあたる。さらに中論十六章觀縛解品十偈に

不離於生死　而別有涅槃　實相義如是　云何有分別

（大正藏三〇・二一b）

na nirvāṇa-saṁāro na saṁsāra-apakarṣaṇaṁ/
yatra kas tatra saṁsāro nirvāṇaṁ kiṁ vikalpayate//

(Prasannapadā. p. 299)

涅槃の建立なく、生死（輪廻）の捨離なき、そこにはいかなる生死、涅槃が分別せられるか。

涅槃は、十八章七偈に示されたるごとく、實相である。しかし、その涅槃は、つねに生死を離れては考えられない。涅槃卽生死である。青目註によれば

諸法實相第一義中、不說離生死別有涅槃、如經說、涅槃卽生死、生死卽涅槃

とあるが、かかる涅槃卽生死のすがたを、羅什は實相義と譯す。

以上、什譯中論における、實相の語を拾つてみたが、唐波羅頗密多羅譯、般若燈論釋（大正藏三〇・一〇八b）、宋惟淨譯、大乘中觀釋論（卍藏廿六の一・六〇a）には、ともに十八章九偈に、tattvasya-lakṣaṇa に對して、眞實相と譯して、什譯の實相に對應する以外、他の部分のいずれにも、實相という譯語を出してはいない。もつて羅什の、實相に對する概念構成の一端を察知できるであろう。

二、法華經

什譯法華經について考察すれば、いわゆる法華經の諸法實相を示す方便品第二（大正藏九・五c）の

唯佛與佛乃能究盡諸法實相、所謂諸法如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果如是報如是本末究竟等

sarvadharmān api tathāgata eva jānāti/ye ca te dharmā yathā ca te dharmā yādṛiçāç ca te dharmā yal lakṣanāç ca te dharmā yat svabhāvāç ca te dharmāḥ/ye ca yathā ca yādṛiçāç ca yal lakṣanāç ca yat svabhāvāç ca te darmā iti/ (Saddharmapuṇḍarika-Sūtra. p. 30, ed. by Kern, Nanjo; p. 29, ed. by Wogihara)

實に如來こそ一切諸法をも知り給う。また、もし何らかの法あらば、それらの諸法とは、そのごとき諸法である。また、それらの法は、見られるごとき諸法であり、また、それらの諸法は、かの相あるものであり、それら諸法は、かの自性あるものであつて、また、かくのごとく見られるままの相あり、自性あるものが、これら諸法であると。

チベット譯においても、大體この梵文と同じ意味內容である。sarvadharmās 一切諸法が、諸法實相の原語となつているが、實相である諸法の內容は、梵文によれば、それのごとき法であり、見られるままの yādriças 法であるという。見られるままのとは、如實のあるがままに、緣起の理のあるがままに見られることである。また、かの相 lakṣaṇa あるもの、自性 svabhāva あるものであつて、lakṣaṇa は外の特相を示し、svabhāva は內なる自體である。相・性を以て、一切法をあらわすことは、大智度論卷三十一（大正藏二五・二九三b）に、性言其體相言可識とあつて、一切法を述べるのと規を一にする。

漢譯においては、以上の梵本の示す點を、十如是の文によつて示している。この點について一考するなら、羅什依用の梵本と、現在用いられる梵本との、類似の程度は、現に知ることはできないが、[5] ただ同等であつたにせよ別であつたにせよ、つぎの點のみは考えられる。このことは本田義英博士も指摘せられたが、[6] 十如是の文と、大智度論卷三十二所載の文との類似であつて、すなわち大論（大正藏二五・二九八c）に

復次一一法有九種、一者有體、二者各各有法、如眼耳雖同四大造而眼獨能見、耳無見功、又如火以熱爲法而不能潤、三者諸法各有力、如火以燒爲力水以潤爲力、四者諸法各自有因、五者諸法各自有緣、六者諸法各自有果、七者諸法各自有性、八者諸法各自有限礙、九者諸法各各有開通方便、諸法生時體及餘法凡有九事、知此法各各有體法具足是名世間下如、知此九法終歸變異盡滅是名中如、譬如此身生從不淨出、雖復澡浴嚴飾終歸不淨、是法非有非無非生非滅、滅諸觀法究竟清淨、是名上如

とあつて、如を上中下の三如に分つのであるが、如は實相の異名なること、大論卷三十二に見え、三如に分つその下如の九法は、法華經の諸法實相である十如是と、內容の類似するのをみる。すなわち、體、力、因、緣、果、性の六法が類同であり、法華經の十如是が、本末究竟と結ぶところを、大論には、滅諸觀法究竟清淨是名上

如といい、如の種々相を究竟清淨の上如におさめる。羅什依用の梵本が、この十如是の形を、明確に打出してあつたものなら、それはそのまま大智度論の、この箇所の類型と思われるし、また現在の梵本のごとき形であつたなら、大論の三如の形式の類型が、意譯されて入つているのではないかと思われる。

下如は世間の如であり、世俗諦であり、究竟清淨の上如は勝義諦であり、中如はその媒介である。見られるがままの yādṛiças 世間の諸法は、常恒ならずと見られたるものであり、畢竟清淨である。これが諸法實相である。畢竟清淨、戲論寂滅の中論の tattvasya-lakṣaṇa が、上如にあたるとすれば、この法華經の諸法實相は、世間の態への展開がある。法開會のみならず、人開會をも爲すという法華經の實相として。肯かれることでもある。

さらに法華經には、序品に（大正藏九・五a）

諸法實相義　已爲汝等說

prakāçito me iya dharmanetrī ācakṣito dharmasvabhāva yādṛiçaḥ／（ed. by kern, Nanjo, p. 29.）

わがこの法眼は示された。見られるがごとき、その法の自性は示された。

とあつて、見られるがままの、その法の自性 dharmasvabhāva が實相と譯されている。dharmasvabhāva は dharmatā であるが、dharmatā 法性が實相と譯され、また實相の異名であることは前に記した通りである。なお、法華經のこの文は、かの十如是のところの梵文と、同じような內容である。

序品に（大正藏九・五b）、實相印と譯されている箇所の原語は、dharmasvabhāva-mudra 法の自性の印である。實相印とは、實相が法の旗幟であるということである。

三　金剛般若波羅蜜經

什譯金剛般若波羅蜜經（大正藏八・七五〇c）に

世尊、若復有人得聞是經信心淸淨則生實相、當知是人成就第一希有功德、世尊、是實相則是非相、是故如來說名實相

とあつて、この場合の實相の原語は bhūtasaṁjñā（Anecdota Oxoniensia, Buddhist Text from Japan, ed. by M. Müller, p. 30）に當る。チベット譯は yaṅ-dag ḥdu-çes である。まさしくは、實想と譯すべきところを、何故、羅什は實相としたのであるか。金剛般若經の異譯の場合を考えてみると、後魏菩提留支 Bodhiruci には、二譯本あつて（A.D. 509譯出、歷代三寶紀卷第三による）一には實

相となし（大正藏八・七五二・C）、別譯には實想とする（大正藏八・七五七a）。　眞諦（A. D. 502-572）譯、　達磨笈Dharmagupta（?-A.D. 619）譯、玄奘（A.D. 602-664）、譯義淨（A.D. 635-713）譯は、いずれも實想、もしくは眞實想とする。ここに實相と實想との二樣の譯し方が、爲されたわけである。羅什が、實相としたことについては、まず羅什依用の梵本に、bhūta-saṁjñā となつていたのかどうかを、考えてみなければならない。しかし、現に見られる梵本、およびチベット譯の、北京・デリゲ版、金剛般若論のチベット譯等よりみれば、いずれも bhūta-saṁjñā であり、また最近、G. Tucci 博士がネパールより發見されたVajracchedikāprajñāpāramitā-sūtra-śāstra-kārikā　能斷金剛般若波羅蜜多經論頌の梵本によれば、(Serie Orientale Roma IX, 1956, p. 59)

(12)adhimuktivaśāt teṣām bhūtasaṁjñā prasādataḥ,/
yathārutāgrahāt saṃyagdeśitatvasya codgrahāt//

a. 彼人依信心　恭敬生實相　聞聲不正取
正說如是取　(Translation of Bodhiruci. Ta. 1511)

b. 由彼信解力　信故生實想　不如言取故
取爲正說故　(Translation of Ching. Ta. 1514)

de dag mos pai dbaṅ gis na/dad pas yaṅ dag ạdu šes so//
sgra bžin ạdsin pa ma yin daṅ/yaṅ dag bstan pa ạdsin p'yir ro//

となつていて、bhūta-saṁjñā に對し、流支譯の實相と、義淨譯の實想とを出しておられる。bhūta-saṁjñā に對し、Tucci 博士の示すところは（同書98 p.）

bhūta-saṁjñā, viz. the assumption according to truth, is something distinct.
the right assumption of truth.

であつて、truth に對する assumption（みなすこと）であり、ある特質であるという。實想と實相の聯關が、考えられているようである。

また羅什は、金剛般若經の別の箇所において、sattva-aṁjñā, jiva-saṁjñā に、衆生相壽者相の譯語をあてている點、また、bhūta-saṁjñā に、同經の他箇所で（大正藏八・七四九a）、實信と譯している點等よりして、羅什譯の意譯的傾向よりしても、什譯依用の梵本の實相の原語は、やはり bhūta-saṁjñā でなかつたかと思われる。また、實想の想の字が、漢譯寫本の流傳の間に、相となつたのではないかとの疑問も考えられるが、すでに僧肇の金剛經註（卍續藏一・三八・三・二一三a）に、實相とし

てでていて、元來が實相であつたと思われる。

bhūta は、存在の形式が、一般的なものの在り方を裏返して眞實の態においてあること、緣起の理のあるがままにあることである。saṁjñā は、俱舍論によれば

想取像爲體（冠導本一・一一b）

想謂於境取差別相（冠導本四・三b）

であり、nimitta をとるのであつて、差別相とは、徵相 nimitta である。

⑦南方阿毘達磨には、佛音の與える解釋に、pajānana は三つの型式を含み、saññā と viññāna とであり、saññā は、色彩ある對象物の認識であり、viññāna は徵相を對象物に見、pajānana は、對象物の源泉と在り方を認識するという。また双對論について、Ledi Sadaw の與えている saññā の理解は、感性的知覺が、より明らかなものの義であるという。

さらに大智度論卷二十三（大正藏二五・二二九a）に、無常・苦・無我等の十想を釋して

問曰、是一切行法何以故或時名爲智、或時名爲念、或時名爲想、答曰、初習善法爲不失故但名念、能轉相轉心故名爲想、決定知無所疑故名爲智

とあり、想 saṁjñā は、智・念・想と、時により稱せられる。bhūta と複合詞となるさいは、相と羅什はしており、また前揭の實信においては信としている。

saṁjñā は差別の相をとることであり、對象を感覺的にとることであるとされるが、それは、sattva-saṁjñā, jīva-saṁjñā などの場合のごときにあてはまるであろう。が、bhūta を對象とするのは、眞實なる存在形式への認識であつて、saṁjñā はこの場合、prajñā のごとき意に解されるのではないかと思われる。その認識は、眞實の徵相・特質を心に印象し、眞實の相を體得する。ゆえに實相は慧眼の竟といわれる（注維摩經）。また言いかえれば、眞實なる存在形式、すなわち實相によりて bhūta-saṁjñā があり得る。このことを達磨笈多 Dharmagupta 譯、金剛般若波羅蜜經論（三卷本大正藏二五・七七a）には

顯示實相中當得實想故

とあつて、實相が顯わし示されたるによりて、實想を得ると會通する。チベット譯（同論はデリゲ版のみ）には

yaṅ-dag ḥdu-çes-gis ḥdu-çes-can

眞實想によりて想あり

とあり、笈多譯は、笈多自身による會通と思われるが、什譯の實相を念頭においての解釋であろう。笈多譯は實相と實想との双方を用いて、金剛般若論二卷本は實想、

三卷本は實相、金剛般若經には實相の譯語をもつて、それぞれ一貫する。笈多譯にあらわれた相卽的理解である。

さて、以上述べたような理由が、金剛般若經の bhūta-saṁjñā に對し、羅什が、そのみずから好んで用いた實相という譯語をあてはめた理由と考えられる。

さらに bhūta-saṁjñā に關しては、我々は原始佛教における yathā-bhūtaṁ-ñāna-dassanaṁ 如實知見を想起する。如實知見とは、一切法を、五蘊假和合の諸行無常・諸法無我と觀ずることであつた。yathā-bhūtaṁ は、緣起の理のあるがごとくに眞實なることである。bhūta-saṁjñā の saṁjñā は、prajñā のような意に用いられて prajñā と ñāna の混同なるべく、ñāna と saṁñā の類同と見るのである。この yathā-bhūtaṁ-ñāna-dassanaṁ 如實知見という、原始佛教の旗幟であつたものが、いま、大乘の bhūta-saṁjñā 實相にうけつがれた系譜なのである。諸佛世に出ずるも出でまざるも、常住に變ることなき緣起の理法に參ずることなのである。

四、維摩詰所說、佛藏經、持世經その他

(イ)什譯維摩詰所說經、見阿閦佛品第十二（大正藏十四・五五四c）に

世尊問維摩詰、汝欲見如來、爲以何等觀如來乎、維摩詰言、如自觀身實相觀佛亦然、我觀如來、前際不來後際不去今則不往

とあり、實相にあたる直接の原語は、チベット譯には見あたらない。衆生身と如來身とを實相と考えている。註維摩詰經（大正藏三八・四・九c）に

肇曰、佛者何也、蓋窮理盡性大覺之稱也……如來靈照冥諧一彼實相、實相之相卽如來相、故經曰、見實相法爲見佛也、淨名自觀身實相以爲觀如來相義存於是、生日、若謂己與佛接爲得見者則己與佛異相去遠矣、豈得見乎、若能如自觀身實相觀佛亦然不復相異、以無乖爲得見者也

といい、如來身、衆生身ともに實相という。如來身の實相については、大智度論卷九十九（大正二五・七四七a）に

a. 諸法實相卽是佛、何以故、得是諸法實相名爲得佛、復次色等如相卽是佛

b. 佛有二種身、一者法身、二者色身、法身是眞佛、色身爲世諦有、法身相上種種因緣說諸法實相

とあり、佛藏經念佛品第二（大正藏一五・七八五a）には

見諸法實相名爲見佛、何等名爲諸法實相、所謂諸法畢

竟空無所有

とあつて、佛・佛身を實相とする。しかして佛身も衆生身もともに、畢竟空のゆえに實相である。

(ロ) つぎに佛藏經についてみると、まず卷第一諸法實相品（大正藏十五・七八二c）は、チベット譯によれば glen-ghi 序品とある。卷第一の內容である、一切諸法無生無滅無相無爲ということよりしての、諸法實相品なる譯し方と思われる。また、經中、諸法實相の譯語について、チベット譯をみると

chos-so cog-gi bden-paḥi mtsham-mo

諸法の眞實の行相

chos-so cog-gi yaṅ-dag-paḥi bden-paḥi mtshan-mo

諸法の眞實なるまことの行相

等である。また、念法品第三（大正藏十五・七八六a）の

若生我想人想衆生想者、當知是人皆是邪行、舍利弗、佛及弟子、不說有我、不說有人、不說衆生、不說壽命、不說斷常、是故佛及弟子、名爲正見……如實見故名爲正見

とあるのは、諸々の想を生ぜば邪行であり、想なきを、正見・如實見とする。それは諸々の想に非る眞實想 bhūta-saṁjñā を如實見と考え、それを實相とした前述の箇所と、同じ意があると思われる。

(ハ) 持世經（大正藏一四・六四二b）には

chos-rnams-kyi yaṅ-dag-paḥi mtshan-ñid

諸法の眞實の特相

chos-rnams-kyi mtshan-ñid

諸法の特相

yaṅ-dag-pa skye-baḥi mtshan-ñid

眞實にて生ぜる特相

等が見當るが、これらについての一々の考察を省略する。

(ニ) 十住毘婆沙論（大正藏五・四七a）には

我順諸法相隨喜、隨喜已亦隨諸法實相、廻向阿耨多羅三藐三菩提、是名上隨喜廻向

とあり、諸法實相にしたがい廻向するを最上とする。

(ホ) 百論破空品第十（大正藏三〇・一八一c）には

我實相中種種法門說有無皆空、何以故、若無有亦無無是故有無一切無

ここでは實相中には有もなく、無もなく、皆空であるという。中論十八章六偈と同じ意趣がみられる。

五、大智度論

摩訶般若波羅蜜經の場合には（大正藏八・二三一b）

chos rnams-kyi chos-kyi mtshan-ñid

諸法の法相

のごときが、諸法實相の原語（チベット譯）として見あたるが、ここには大智度論を中心に考えてみたい。智度論はその歸敬偈（大正藏二五・八五七c）に

我今如力欲演說大智彼岸實相義[5]

とあるように、一論において實相を說き、また

般若波羅蜜實相異名

と至るところに說く。般若波羅蜜の智慧を、實相の異名とするのは、先の bhūta-saṁjñā の場合を想起せしめるが、原始佛教の如實知見は、大乘の般若波羅蜜となつたが、その般若波羅蜜の同義異名が實相であり、我々の先に述べた意味の聯關がみられるようである。もつとも、大乘義章（大正藏四四・六六九a）には、智度論の實相般若をもつて、觀照般若所知の境にして、體は般若に非ず般若を生ずるものとするが、これは先に述べた達磨笈多の、顯示實相中當得實想故を思わしむるものである。實想なる智 bhūta-saṁjñā によりて、實相なるその眞實の存在形式が、我々のものとなり、能所不二、相卽が考えられるべきであろう。

さらに智度論卷十八（大正藏二五・一九〇b）には

實相者不可破壞常住不異無能作者……非常非無常非苦非樂……滅一切言語離諸心行從本已來不生不滅如涅槃相、一切諸法相亦如是、是名諸法實相

とあつて、ここに述べる內容は、前揭中論十八章七偈の內容と等しく、實相の原語に tattvasya-lakṣaṇa を思わしめる。

卷三十二（大正藏二五・二九七c）には、實相の異名に如・法性・實際をあげる。この一聯の語は放光般若經等にも、如・法性・眞際として、しばしば出ずるところであつたが、羅什譯は、これを實相の異名としている。

如 tathatā とは、[9]ものがあるが如くにあるすがた、緣起の理法のおもむく如くあるすがたである。それは bhūta であり、法華經の諸法實相のあり方でもあつた。智度論の示すところは、卷三十二（大正藏二五・二九七b）に

諸法如有二種、一者各各相、二者實相、各各相者、如地堅相水濕相火熱相風動相、如是等分別諸法各自有相、實相者於各各相中分別求實不可得不可得

とあるが、また、前揭の三如の文に續いて

有人言、是九事中有法者是名如、譬如地法重水法冷濕火法熱照風法流動心法識解、如是等法名爲如、如經中說、有佛無佛如法相法住常住世間、所謂無明因緣諸行

常如本法

とあつて、前文に、諸法の如を、各各相と實相とを示し、後文には、その各各相を、如と名ずけ、本法の如しというが、法華經十如是の實相とも意義の關聯があり、また、のちに述べる羅什の實相論であるところの大乘大義章の文とも關聯がある。

法性 dharmatā は、智度論（卷三二）に

空有差品是爲如、同爲一空是爲法性

と示し、如の存在樣式に比し、空の畢竟性である。

實際 bhūta-koṭi は、智度論（卷三二）に

a. 實際者如先說法性名爲實、入處名爲際

b. 法性者無量無邊非心心數法所量是名法性、妙極於此是名眞際

とあり、無量無邊の法性の妙極が實際である。bhūta の邊極である。

大智度論には、この他、實相の異名として、空、阿耨多羅三藐三菩提、中道、涅槃、阿耨跋致等をあげ、しばしば實相の智慧ともいう。

六、大乘大義章

羅什が慧遠の問に答えた大乘大義章は、實相論にふれていて、羅什のその概念を察しうるが、初問答眞法身の條（大正藏四五・一二三a）に

若言法身無來無去者、卽是法身實相、同於泥洹、無爲無作

とあつて、法身を實相とする。中論十八章七偈に示された法性實相と同じ內容が、ここには法身實相をもつて示されている。

次重問法身並答の條（大正藏四五・一二三c）に

大乘部者謂一切法無生無滅、語言道斷、心行處滅、無漏無畏、無量無邊、如涅槃相、是名法身、及諸無漏功德、並諸經法、亦名法身、所以者何、以此因緣得實相故

ここには中論十八章八偈と同じ內容が示され、中論には tattvasya-lakṣaṇa をもつていわれたのが、ここに法身をもつて語られる。法身卽實相をいう。

次問如法性眞際並答（大正藏四五・一三五c）の條に

所謂斷一切語言道、滅一切行、名爲諸法實相、諸法實相者假爲如法性眞際、此中非有非無尙不可得、何況有無耶（中略）若如實得諸法性相者一切義論所不能破名爲如、如其法相非心力所作也、諸菩薩利根者、推求諸法如相、何故如是寂滅之相、不可取不可捨、卽知諸法

如如相性自爾故、如地堅性水濕性火熱性風動性、火炎上爲事、水流下爲事、風傍行爲事、如是諸法性相自爾、是名法性、更不求勝事、爾時必定、盡其邊極、是名眞際、是故其本是一義、尙名爲三如（中略）眞際爲上、法性爲中、如爲下、隨觀力故而有差別、又天竺語音相近者以爲名、是故說知諸法如、名爲如來

これは、智度論卷三十二の如・法性・實際の條下とほぼ合致するが、語言道斷、滅一切行のところを諸法實相となし、そこには有無なく、非有非無すら不可得であるとするのは、かの中論十八章の前掲の一聯の偈を思わしむる。その中に、かりに如・法性・眞際を、實相の樣態として說く。眞際とは、その中、最邊極の云い方であり、法性は諸法の相性自爾なるものであり、如は空有の差品である。この文にも三如の考え方が出されているが、戲論寂滅、畢竟空無なる存在樣式の第一義諦も、地の堅性、火の熱性も、水の流れ、風の動きも、自然法爾として、現象さながら實相であるとする。しかして、如・法性・眞際の語は、梵語においても、近似せる言語であることを、天竺語音相近といつているが、このような相近の語、意義に對し、羅什は、實相なる譯語を、みずから好んで、一括して與えていたのではないかと思われる。

つぎにこの文に續いて

又小乘經中亦說、如法性如離（ママ）阿含中、一比丘問佛世尊、是十二因緣法爲佛所作、爲餘人所作、佛言、比丘是十二因緣非我所作亦彼所作、若有佛若無佛、諸法如法性、法性常住世間云々

とあつて、前述のように、阿含の傳統をくむ如實知見の內景が、常住の法・實相印として示されている。

さらに、大乘大義章には續いて

眞際義者唯大乘法中說、以法性無量如大海水、諸聖賢隨其力所得

といい、無量無邊なる實相は、機の淺深にしたがい、取得せられるに大小ありという。

む　す　び

以上、大略の概觀をなしおえたが、羅什譯において、實相という譯語をもつて示されたその原語は、中論における tattvasya-lakṣaṇa（眞實性の特相）が、直接、それに當ると思われる。また、チベット譯のみではあるが、持世經の chos-rnams-kyi yaṅ-dag-paḥi mtshan-ñid（諸法の眞實相）なども、それにあたる。

また一方、金剛般若經における bhūta-saṁjñā は、原

始佛教以來の如實知見の系譜を、大乘において、實相としてうけとめたものであろうと、推察したのであつた。しかして、實相とは、能所不二、理智冥合の境において考えらるべきことであるとも、述べてきた。

また、實相という譯語は、種々なる梵語を、その思想意義の同等のゆえをもつて、原語としてもつものであり、まことに多含な言語であつて、般若波羅蜜、法性、如、實際、空、中道、法身、如來身、衆生身、涅槃等または、これらに類似した思想內容が、實相の異名としてあげられ、また、實相という譯語におきかえられたのは、インド思想を收約した羅什自身の創意によると思われる。

實相は、tattva の示す、戲論寂滅、心行處滅の第一義諦から、さらに現象の一切にわたつて、見られるままの生死の世界そのままに、實相であるという、これが、羅什譯の、實相なる譯語の上にもたらした義であり、また羅什の實相論である。

註

（一） 宇井博士「釋道安研究」五七頁參照
（二） 中論釋、プーサン本、三六四一二行
（三） 長尾博士「西藏佛教研究」一九七頁參照
（四） 山口博士「中觀佛教論攷」二五一、三一九頁參照
（五） 法華經の西域出土本の研究はおいおい爲されつつあり、また添品妙法蓮華經序（大正藏九・一三四c）に、昔燉煌沙門竺法護於晋武之世譯正法華、後秦姚興更請羅什譯妙法蓮華、考驗二譯、定非一本、護似多羅之葉、什似龜茲之文、余撿經藏備見二本、多羅則與正法符會、龜茲則共妙法允同云々とあつて、什譯依用梵本が、龜茲の文に近いとするなら、近時發見紹介せられつつある西域の佛典文獻は、インド本土の梵本に比し、より羅什に近いと見るべくこれらの實相譯語論も、全面的な西域文獻の出現をまつて、爲さるべきものと思われるが、その出現の未だしき現段階には、これらの考察も許さるべきものかと思う。
（六） 「佛典の內相と外相」三八一頁參照
（七） 佐々木教授「智慧の概念」（大谷大學研究年報六）一七五頁參照
（八） 大智度論フランス譯ラモート本、一卷、三頁に le vrai esns de la Mahāprajñāpāramitā と譯している。一八頁に le vrai caractère des Dharma, と譯し、以下大體同じである。一三頁には bhūtalakṣaṇa の還元梵語を與えている。
（九） 山口博士「空の世界」三五頁參照